

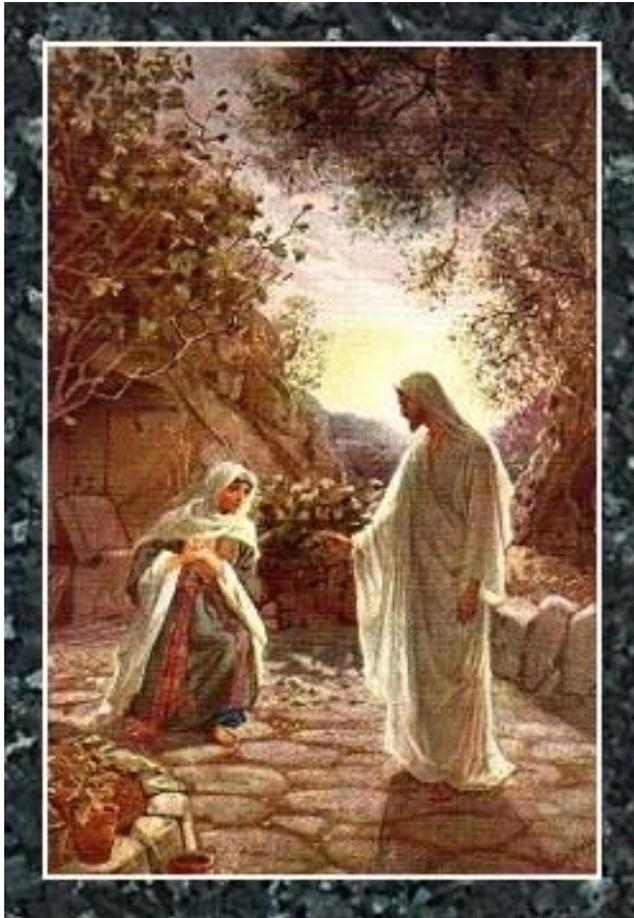
今朝は復活節。キリストの復活の記事を学び、よみがえりの主を覚え礼拝していきましょう。

### 1. 墓には遺骸はなく (1~10)

- ①マグダラのマリヤ (1~3) 「さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子のところに来て、言った。『だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。』そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。」日曜日の早朝です。十字架から三日目。キリストが埋葬された墓に、マグダラのマリヤがやってくると、入口を閉じている石がのけてありました。遺骸が見当たりません。彼女は動転してすぐにペテロとヨハネに、そのことを報告しました。二人はすぐに墓に向かいます。
- ②亜麻布 (4~7) 「ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょではなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。」二人は全力で走って墓に向かいます。ヨハネは駆け足が速く、墓に着くと中をのぞきこみました。ペテロは後から来て、先に中に入りました。亡骸に巻かれていた亜麻布が残っていました。頭に巻かれていた布切れは少し離れてあるのも見ました。
- ③復活の理解はなく (8~10) 「そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。」ヨハネも中に入り、状況を見て、キリストの遺骸が盗まれたのではなく、生前にキリストが言われていたことが実現したと信じました。とはいえ、キリストの復活については、まだよく理解していませんでした。とりあえず、二人は帰って行きました。

### 2. 二人の御使いと主イエス (11~15節)

- ①ふたりの御使い (11~12) 「しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓のなかをのぞき込んだ。すると、ふたりの御使いが、イエスのからだがかがれていた場所に、ひとり頭のところ、ひとり足のところ、白い衣をまとってすわっているのが見えた。」マリヤは墓に戻って来



て、そこで泣いていました。そして再び、墓の中をのぞきこみました。すると、ふたりの御使いがそこにいたのです。キリストが安置されていた頭と足あたりに、それぞれが白い衣を着て座っていました。マルコの福音書では「青年」とありますので、印象としてはそのようなものだったのでしょう。

②わたしの主を盗み (13)「**彼らは彼女に言った。『なぜ泣いているのですか。』**彼女は言った。『だれかが私の主を取っていきました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。』彼らはマリヤが泣いている理由をたずねます。彼女は、誰かがイエスの遺骸を盗んでいったとばかり思っていましたので、そのことを伝えたのです。彼女はその遺骸がどこかに隠してあるのに違いないと考えていたのです。

③後ろに立つ主 (14~15)「**彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。イエスは彼女に言われた。『なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。』**彼女は、それを園の管理人だと思って言った。『あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります』彼女は墓の外にあったときに、彼女のうしろに誰かがいます。それは復活のイエス・キリストでした。その人は「どうして泣いているのですか。誰を捜しているのですか。」とたずねます。彼女は相変わらずイエスの遺骸を捜していましたので、その人が園の管理人だと思ひ込み、「あなたが運んだのでしたら、私が引き取りますから・・・」と伝えました。

### 3. 主だとわかったマリヤ (16~18 節)

①ラボニ (16)「**イエスは彼女に言われた。『マリヤ。』**彼女は振り向いて、ヘブル語で、『ラボニ (すなわち、先生)』とイエスに言った。」復活の主が「マリヤ」と呼びかけられた瞬間、彼女のうちにおそらく電撃が走ったのです。わかったのです。ヘブル語で「ラボニ!」。いつも彼女が主に呼びかけていた言葉でしょう。驚きと喜びがそこに溢れています。

②すがりついてはならない (17)「**イエスは彼女に言われた。『わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに「わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る」と告げなさい。』**マリヤはイエスにすがりついて、喜びをあらわそうとしましたが、主は「すがりついてはいけません」と言われました。それは主が父のもとに上ることによって、十字架、復活の出来事が完成するからです。マリヤという個別の人ではなく、すべての人に対する救いの出来事が完成する必要があったのです。そこで、主はご自分が天の神のもとに上ることを、弟子たちに伝え

るよう、マリヤに命じたのです。

③主にお目にかかりました (18)「**マグダラのマリヤは、行って、『私に主におめにかかりました。』**と言い、また、**主が彼女にこれらのことを話された**と弟子たちに告げた。」マリヤは主のご命令を受け入れ、弟子たちのところに行って、「私は復活された主と出会いました」と告げ、天に昇られるというメッセージも伝えたのでした。

《結論》イエス・キリストが復活されたという出来事は、キリストの十字架の出来事と合わせて福音そのものです。

「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また葬られたこと、また聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」(第一コリント 15:3-5) とある通りです。

しかし、この福音を聞いた時に、人はどのようなとらえ方をするでしょう。今朝の聖書記事のなかに、それが示されています。マグダラのマリヤに起きたことを見ていきましょう。彼女が墓にやって来た目的は、イエス・キリストの亡骸に香料を塗ることでした(ルカ 24:1)。ですから、墓石が空いていて、亡骸がなくなっているのを見たときは、卒倒せんばかりでした。誰かが、大切な主イエスの体を盗んで行ってしまったと考えたからです。亡骸とはいえ、主のお体があれば、油を塗ることによって、主のご存在を確認したり、思い出したりすることができると思ったからです。ところが、そのお体がないので、彼女は取り乱したのです。マリヤはペテロやヨハネに伝えに行った時も、問題にしたのは、主イエスの亡骸のことでした。遺骸が誰かに盗まれてしまったと報告しているのです。復活のイエスキリストが目の前に現れて下さっても、彼女は気付かず、園の管理人だと思い、「あなたが亡骸を運んだのなら、返してください。私が引き取りますから」と言っているのです。どこまでいっても、彼女にとっては、この地上の死の亡骸を見つけ出すことにやっきになっていたのです。

なぜ、イエスを目の前にして、マリヤはそれがわからなかいのだ、と思う方もいらっしゃるでしょう。でも、私たちも同じような者達です。これまでの常識や先入観、科学的知識などにとらわれていれば、目の前にある真実を、事実として受け取ることはなかなかできないのです。私たちも、マリヤと同じように、抛り所を亡骸のなかに探そうとする者たちなのです。自分の経験や常識を絶対化しているがゆえに、目の前の復活の主に気づかないのです。

それではマリヤはどのようにして復活の主と出会ったのでしょうか。それは、主が「マリヤ」と声をかけてくださったからです。そ

の時、彼女のうちに事が起こったのです。目の前の方は主イエス・キリストだとわかったのです。主は復活されたのだ！ とわかったのです。出会いは恵みだったのです。

それでは、私たちに、主は声をかけてくださらないのでしょうか。「見よ。わたしは戸の外に立ってたたき」とあるように、私たちにも主は、「〇〇よ」と声をかけてくださっています。魂の耳をすまし、主の声に耳を傾け、「主よ」と応えていくことができるのです。そこに事が始まるのです。その時に、復活の主と相まみえることになるのです。クリスチャンにとっても、現実を復活の主の前に申し上げていくことは、「御霊によって歩みなさい」につながり、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」といった御霊の実をいただいていくのです。復活の主の恵みが一同の上に豊かにありますように。